

9. 子どもの権利条約への歩み

これまでのお話しを通して分かることは、ホロコーストで犠牲となった、150 万人の子どもたち一人一人に物語があり、夢や希望があったことです。そのかけがえのない尊い命が失われました。それを受けて、1945年に発足した国際連合（以下国連）が、これまで取り組んできた人権尊重の歩みに触れます。

●世界人権宣言

1948年には「世界人権宣言」が採択されました。この宣言の第1条に、「全ての人間は、生れながらにして自由であり、かつ尊厳と権利とについて平等である。人間は理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない」とあり、子どもも人権の主体としています。

エレノア・ルーズベルトと
世界人権宣言（1949年）



●児童の権利に関する宣言

「児童の権利に関する宣言（ジュネーブ宣言, 1924年）」は、1946年から改正作業に入り、1959年11月20日、「児童の権利に関する宣言」が国連総会で採択されました。この宣言は、「世界人権宣言」を踏まえて、人権として子どもの権利を規定しました。10条からなります。

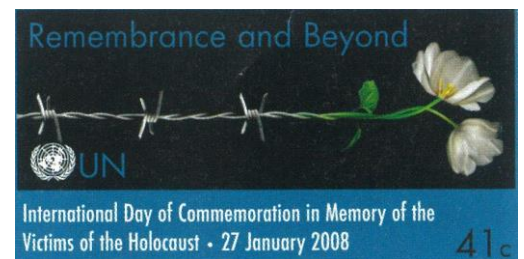
●児童の権利に関する条約

上記の宣言を単に宣言としてではなく、子どもの権利の保障を義務付ける条約にしようと主張したのは、第二次世界大戦で多くの子どもが犠牲となったポーランドでした。国連は1976年に、「国際児童年に関する決議」を採択し、1979年を国際児童年と決定しました。また、国連教育科学文化機関

(UNESCO、ユネスコ)はコルチャック生誕百周年を記念して、「1978年・1979年」をコルチャック年と決めました。さらにコルチャック研究者たちは、1979年国際コルチャック協会を設立し、1980年子どもの権利条約の実現に尽くす決議をしました。フランス革命（自由・平等・博愛）の人権宣言から200年後、「児童の権利に関する宣言」から30年後の1989年11月20日に、「児童の権利に関する条約」（通称「子どもの権利条約」）が国連総会で採択され、1990年9月2日に発効しました。この条約は、児童を「保護の対象」ではなく、「権利の主体」としており、18歳以下の子どもはだれでも自己の潜在能力を発展させ、飢え、貧困、放置や虐待がないことを求める、個人の権利を定めています。コルチャックが主張した「子どもの権利」が反映されました。日本は1994年に条約を批准し、5月22日効力が発生しました。

●国際ホロコースト記念日

2005年11月1日、国連総会はホロコースト記念の歴史的決議、即ちホロコーストの犠牲者を追悼して、「毎年1月27日を国際ホロコースト記念日」とする決議を採択しました。また、総会はホロコーストに関する「アウトリーチ・プログラム（垣根を超えた行動計画）」への参加を呼び掛けました。このプログラムのテーマは「記憶を超えて」です。それは2つの要素、即ち「犠牲者の記憶をたどること」、及び「将来ジェノサイドが起こらないようにすること」を強調しています。



国際連合記念切手（2008年1月27日）

●「ホロコースト否定論」非難決議

2007年1月26日、「ホロコーストはなかった」（ホロコースト否定論）という主張を非難する第2の決議案が総会で採択されました。

しかし、世界の現状を見ると、宣言や条約の内容が十分実現されているとは言えない状況にあります。また、折に触れて、世界の各地で反ユダヤ主義の流れが顕在化しているように思われます。

10. 話しのまとめ

今回の話しのまとめに入ります。

●コトウチュさんとオットーさんの平和への願い

テレジン収容所の「男の子の家（L417）」の1号室の文化委員で、「ヴェデム」の編集助手をしていた、クルト・イルジー・コトウチュ（1929～2008）さんは、語っておられます。

「ホロコーストの悲惨さは経験をしていなければわからないことです。…しかし、若い人たちや子どもたちに私たちが体験した悲劇を理解してもらい、1940年代の出来事を可能なかぎり身近に感じてもらいたいです。そして、みなさんの心の琴線に触れたところから、『平和のために何か良いことをしよう』と、思っただけで幸いだと思います。」

このコトウチュさんの言葉は、「アンネたちの死にただ同情するだけではなく、平和をつくる人になってください。希望の光がいつまでも輝きますように。」と訴え続けておられた、アンネ・フランクの父オットー・フランク（1889-1980）さんの思いに繋がるものがあります。



クルト・イルジー・コトウチュ



オットー・フランク



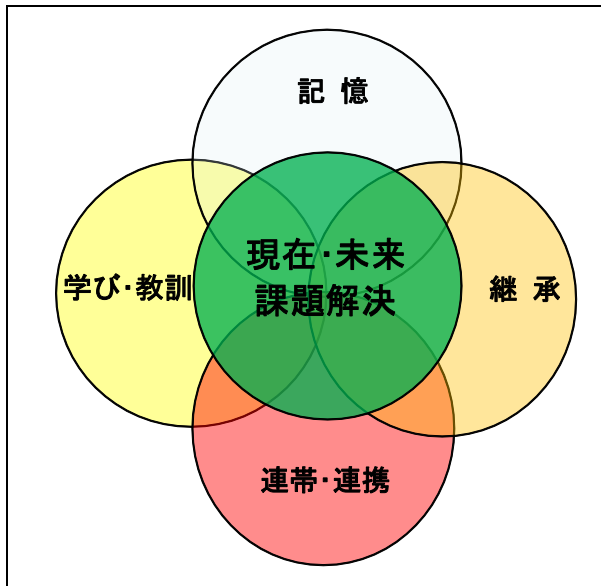
オットーさんから贈られた燭台

●現在/未来の課題解決に向けて、ホロコーストの学び

ホロコーストの時代には、子どもの生命や人権が軽視、蔑ろにされたばかりではなく、彼らの豊かな才能や個性、無限の可能性が奪い取られました。子どもたちが残した、日記、小説・エッセイ、童話、雑誌、絵や詩には、辛い現実の生活だけでなく、彼らが抱いていた夢や希望が想像力豊かに描かれています。

ホロコーストの学びは、単に過去の歴史的事実の理解だけで終わるものではありません。今を生きるわたしたちにとっても無関係ではない問題（差別、憎しみ、偏見、いじめ、無関心、沈黙や傍観者的態度等）を投げかけています。これらの問題は人類が抱える普遍的テーマと言えます。過去を記憶し、継承し、その中から学びと教訓を得、他者と連帯・連携して、それぞれの置かれた立場・立場で、現在・未来の問題解決に取り組むことが求められていると思います。

「虚偽に代えて事実・真実を、破壊に代えて建設・創造を、虐殺に代えて相互理解・信頼を、憎悪に代えて博愛・慈愛を、怒りに代えて寛容・受容を、傍観・沈黙に代えて連帯・行動を」育み、次世代に継承していくことが大切だと思います。最終的には神に似せて造られた、人間一人一人が人生の折々の問いかけに対して正しい判断と対応をすることが求められているのではないのでしょうか。

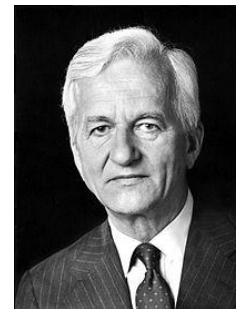


- 【創造と次世代への継承】**
- ・虚偽 → 事実・真実
 - ・破壊 → 建設・創造
 - ・虐殺 → 理解・信頼
 - ・憎悪 → 博愛・慈愛
 - ・怒り → 寛容・受容
 - ・傍観 → 連帯・行動

ドイツが、ナチスの行なったホロコーストに対して、より一層真剣に向き合うようになったのは、ヨーゼフ・メンゲレが死亡した1979年の後、1980年代になってからだと思います。西ドイツの元大統領ヴァイツゼッカー（1920-2015）氏が、戦後40年目にあたる、1985年5月8日に行なった、非常に有名な演説の一部を紹介して終わりとします。

【西ドイツ大統領ヴァイツゼッカーの記念演説】
(1985年5月8日ドイツ降伏40周年)

「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在に対しても盲目となります。
非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」
(岩波ブックレット・ヴァイツゼッカー『荒れ野の40年』より)



ヴァイツゼッカー

今回の「ペトル・ギンズ少年のお話し」を通して、無意味な偏見・差別をなくし、愛と平和のメッセージが届くことを、強く願っています。

長期間にわたって、拙文にお付き合いいただき、誠に有り難うございました。

【参考図書】

- ・「ペトル・ギンズ少年の物語」テキスト
- ・「アンネ・フランク展『希望の未来』」テキスト
- ・「アンネ・フランクのやさしい学び」テキスト